

川越街道【Ⅶ】川越市内②コース順番

西武新宿線 本川越駅（集合 1F改札口 午前9時30分）

～中院（鐘楼門・狭山茶発祥の地碑・泥足地藏・不染亭・山門）・WC

～南院遺跡

～仙波東照宮（隨身門石鳥居）

～喜多院（鐘楼門・慈眼堂・曆応の古碑・多宝塔・巖島神社・苦めき地藏尊・どろぼう橋・慈恵堂・庭園
・五百羅漢・太子堂・山門）・WC

～喜多院 本地堂瑠璃薬師殿跡

～仙芳仙人塚

～日枝神社（日枝神社古墳）

～（三変稻荷神社古墳）

～成田山川越別院・WC

～片葉の葦の石碑・浮島稻荷神社

～田曲輪門跡

～浅間神社・富士見櫓跡

～三芳野神社・WC～川越城跡

～川越城本丸御殿・WC

～川越城中ノ門堀跡

～川越氷川神社（柿本人麻呂神社・舞殿・八坂神社）

～東明寺（川越夜戦古戦場跡）

～広濟寺（あごなし地藏・金比羅大神）

～喜多町バス停

⇒東武東上線 川越駅

川越街道ウォーク【Ⅶ】川越市内②

歩行距離 約8.8km(中院・喜多院・川越城本丸御殿他参拝・拝観見学を含む)

集合場所 西武新宿線本川越駅 1F改札口

集合時間 午前9時30分

コース 本川越駅～中院(鐘楼門・狭山茶発祥の地碑・泥足地蔵・不染亭・山門)～南院遺跡～仙波東照宮(隨身門石鳥居)～喜多院(鐘楼門・慈眼堂・曆応の古碑・多宝塔・巖島神社・苦ぬき地蔵尊・どろぼう橋・慈恵堂・庭園・五百羅漢・太子堂・山門)～仙芳仙人塚～日枝神社(日枝神社古墳)～(三麥稻荷神社古墳)～成田山川越別院～片葉の葦の石碑～浮島稻荷神社～田曲輪門跡～浅間神社・富士見櫓跡～三芳野神社～川越城跡～川越城本丸跡～川越城中ノ門堀跡～川越氷川神社(柿本人麻呂神社・舞殿・八坂神社)～東明寺(川越夜戦古戦場跡)～広濟寺(あごなし地蔵・金比羅大神)～喜多町バス停⇒川越駅
川越駅→朝霞台～北朝霞→西国分寺

本川越駅の東口を出、中央通りを横切り、八十二銀行川越支店横の道を東進、100m程で突き当たるので左折。10m程の丁字路を右折。120m程の八幡通りを横切り、100m程で県道39号線(川越街道)に出るので左折。50m程の丁字路を右折し、50m弱の丁字路を右折。80m程の最初の丁字路を左折し、何本かの道路を横切り450・60mでグラウンドに突き当たるので左折、塀沿いに40m程進んだ左に「中院」の「鐘楼門」がある。

中院

(中院HPより)

『天長7年(830)伝教大師最澄の弟子、慈覚大師円仁が、芳道仙人の古跡(後の仙芳仙人塚で記述)であった仙波の霊場を天皇に奏上。あらためて一寺を建立し、星野山無量寿寺仏地院の勅号を賜りました。この星野山無量寿寺仏地院が中院です。』

永仁4年(1296)中興祖師尊海は天台の顕教(法華経)、密教(真言密教)の教えを広め、関東天台の教寺580余ヶ寺すべて仙波の仏寺院に付属し、関東天台の本山の勅許を得ました。

後に、尊海和尚は仏蔵院(北院＝現喜多院)、多聞院(南院)も建立します。そして、当山は天台宗関東八箇檀林(今で言う大学院)の筆頭として興隆。日蓮上人に恵心流伝法灌頂を受けたのも当山です。

人皇106代後奈良院の時、天文6年(1537)北条氏綱が河越城を攻めた際、兵火にかかり当山は灰燼と帰しました。

寛永9年(1632)当山28世尊能が中興しましたが、寛永15年(1638)の川越大火により焼失。翌年の寛永16年(1639)現在地(境内地内)に移動。享保18年(1733)に本堂を再建しました。(後略)』

中院は、平安時代初期の天長7年(830)、淳和天皇の命により、慈覚大師円仁が当地で「星野山(せいやさん)無量寿寺」と号する寺を建立。その無量寿寺は中院を中心に「北院＝現喜多院」「中院」「南院(明治の初めに廃寺)」の3支院で構成された。北院に天正18年(1590)に天海が来、慶長4年(1599)に北院の住職になるまでは、この中院が最も強い勢力を持っていたという。

寛永15年(1638年1月28日)の川越の大火で建物の大半が焼失し、寛永16年(1639)復興の折、中院があった場所に仙波東照宮が建てられ、中院は200m程南の現在地に移転。

境内に「狭山茶発祥の地」碑がある。

河越茶 狭山茶の起源

夫れ茶は遠く平安の昔傳教大師最澄和尚 中国天台山国清寺より伝来し京都に栽培せしより始まる
後慈覚大師圓仁和尚天長七年(830年)當地仙波に星野山無量寿寺仏地院建立に際し比叡山より茶の実
を携え境内に薬用として栽培す これが河越茶 狭山茶の起源である。

當山茶園の茶株を此処に移植し長く伝承す

左奥の墓地に、島崎藤村の義母・加藤きみの墓がある。また、藤村が義母に贈った茶室「不染亭」が移
設されている。また、「泥足地藏」がある。

泥足地藏

連日の日照り続きで、お百姓さんたちは、田植えができず困り果てていました。

そこでお百姓さんは地藏尊に祈念することになりました。

すると大雨が降り出したので、お百姓たちは田植えを終えることができました。

しかし、ある一人のお百姓さんだけは腹痛のために田植えをすることが出来ませんでした。

仲間はそんな彼のことを心配しました。

ところが翌朝、仲間たてが彼の田んぼを見に行ったところ、田植えは既に終わっていたのです。

お百姓さんたちは不思議に思いつつ、地藏尊の元へお参りに行きました。

すると、そこには腰から足にかけて一面泥にまみれたお地藏様が立っていたのです。

以来、このお地藏様は「泥足地藏」「身代わり地藏」と呼ばれ、深く信仰されました。

中院から北に120m程、東照宮中院通りの右手前角に、お地藏様や墓石が無造作に並ぶ一角がある。
ここが中院、喜多院と肩を並べた「南院」の跡地です。

南院の創建は、喜多院・中院と同じ平安時代初期(天長年間、824~833)で、当時の名は「多聞院」で、
「仏地院(中院)」「仏蔵院(北院・喜多院)」と共に「星野山無量寿寺」の一院でした。

南院のあった場所は、現在の仙波東照宮の隨身門の前、東側で、遺構等は残っていません。明治初期に
起こった廃仏毀釈により廃寺となっしまい、当時、南院にあった石碑や石仏を集めた場所がここで、約20
坪。南院の塔頭や僧侶たちの住居(広仙坊)などがあった場所と伝えられています。

(南院には聖天堂、放光堂の他、成就坊、仙境坊、広仙坊、星行坊、明星坊、常蔵坊の七坊があった。)

仙波東照宮

仙波東照宮は、中院の北、元中院があった場所にある。

家康は、元和2年(1616)4月17日巳の刻(午前10時頃)、駿府城において75歳(満73歳4か月)で死去
した。即夜、久能山に遺体は移された。

『本光国師日記』によると、家康は遺言として「臨終候はば御躰をば久能へ納。御葬禮をば増上寺にて申付。
御位牌をば三川之大樹寺に立。一周忌も過候て以後。日光山に小き堂をたて。勸請し候へ。」としている。

遺言に従い、葬儀は増上寺で行われ、遺体は駿府南東の久能山(現・久能山東照宮)に葬られ、そして遺
言通り、一周忌を経て関東最北部にある日光の「東照社」に分霊された。

神号「東照大権現」は元和3年(1617)2月に、神階「正一位」は3月に贈られた。「東照社」は正保2年(16
45)11月に宮号宣下があり、「東照宮」となった。

遺骸の日光への移送は、久能山を元和3年(1617)3月15日に出発、途中3月23日、仙波喜多院の大堂に到着し、天海僧正が導師となって26日までの4日間法要が行われた。元和3年9月に家康公の像を造り喜多院の境内(現在の喜多院慈眼堂のある所と思われる。)に大堂を造り祀ったのが「東照宮(東照社)」の初め。

寛永15年(1638)1月28日、川越の街に大火災が起こり、仙波喜多院、中院、南院の殆どが焼失。三代将軍家光の命により、川越城主堀田加賀守正盛が奉行、天海僧正を導師として、寛永17年(1640)5月、中院があった場所に竣工。現社殿はこの時のものと言われている。

本殿・唐門・瑞垣・拝殿・幣殿・石鳥居・隨身門は国の重要文化財になっている。

重要文化財・建造物 仙波東照宮

徳川家康をまつる東照宮は、家康の没後その遺骸を久能山から日光に移送した元和三年(1617)三月、喜多院に四日間逗留して供養したので、天海僧正が寛永十年(1633)一月この地に創建した。その後寛永十五年(1638)正月の川越大火で延焼したが、堀田加賀守正盛を造営奉行とし、同年六月起工、同十七年完成した。当初から独立した社格をもたず、喜多院の一隅に造営されたもので、日光・久能山の東照宮とともに三大東照宮といわれている。社の規模は表門(隨身門)・鳥居・拝幣殿・中門(平唐門)・瑞垣・本殿からなっている。本殿の前には歴代城主奉献の石灯籠がある。なお、拝殿には岩佐又兵衛勝以筆の三十六歌仙額と幣殿には岩槻城主阿部対馬守重次が奉納した十二聡の鷹絵額がある。

埼玉県教育委員会

川越市教育委員会

東照宮隨身門・石鳥居

境内入口にある隨身門は朱塗八脚門・切妻造で とち葺形銅板葺きである。(中島注:とち葺きとは、板葺きの一種で、板の厚さにより柿葺(こけらぶき一板厚2~3mm)、木賊葺(とくさぶき一板厚4~7mm)、栩葺(とちぶき一板厚1~3cm)の種類がある。)以前には後水尾天皇の御染筆なる「東照大権現」の額が掲げられていた。記録によるとこの勅額は寛永十年(1633)十二月二十四日とあるから東照宮の創始の時期を知る一つの資料となっている。(中島注:勅額は現在拝殿に掲げられている。)

石鳥居は寛永十五年(1638)九月に造営奉行の堀田正盛が奉納したもので、柱に「東照大権現御宝前、寛永十五年九月十七日堀田加賀守従四位下藤原正盛」の銘文が刻まれており、様式は明神鳥居である。

川越市教育委員会

石鳥居の先にある急な石段の先が社殿で、天海僧正は高さ5間の丘陵を築き上げて、その上に社殿を造ったとのこと。

重要文化財・建造物 東照宮拝殿・幣殿

拝殿は桁行三間(5.36m)、梁間二間(3.64m)で、単層入母屋造、正面は向拝一間(1.82m)あって銅板本葺である。(中島注:本葺は本瓦葺と同じ。平瓦と丸瓦を交互に組み合わせて屋根を葺くこと。またその屋根。)幣殿は桁行二間、梁間一間で背面は入母屋造り、前面は拝殿に接続し、同じく銅板本葺である。内部も朱塗で美しく、正面に後水尾天皇の御染筆なる東照大権現の勅額が懸けてある。記録によると寛永十年(1633)十二月二十四日とあって、東照宮創建当時の貴重なものとされている。川越城主であった柳

沢吉保や秋山但馬守喬朝の頃に大修理があったと伝えられているが、松平大和守の弘化四年(1847)にも修理が行われたという。

平成三年三月

埼玉県教育委員会

川越市教育委員会

拝殿の前、左右には川越藩主たち奉献の石燈籠二十六基が立っている。

喜多院

喜多院の由来

天台宗川越大師喜多院は、仙芳仙人の故事によると奈良時代にまでさかのぼるかもしれませんが。伝えによると仙波辺の漫漫たる海水を法力により除き、そこに尊像を安置したといいますが、平安時代、淳和天皇の勅により天長7年(830)慈覚大師円仁により創建された勅願所であって、本尊阿弥陀如来をはじめ不動明王、毘沙門天等を祀り、無量寿寺と名づけました。

その後、元久2年(1205)兵火で炎上した後、永仁4年(1296)伏見天皇が尊海僧正に再興せしめられたとき、慈恵大師(元三大師)をお祀りし官田50石を寄せられ関東天台の中心となりました。

正安3年(1301)後伏見天皇が東国580ヶ寺の本山たる勅書を下し、後奈良天皇は「星野山—現在の山号」の勅額を下しました。更に天文6年(1537)北条氏綱、上杉朝定の兵火で炎上しました。

慶長4年(1599)天海僧正(慈眼大師)は第27世の法灯を継ぎますが、慶長16年(1611)11月徳川家康公が川越を訪れたとき親しく接見しています。そして天海の意見により寺領4万8000坪及び500石を下し、酒井備後守忠利に工事を命じ、仏蔵院北院を喜多院と改め、又4代徳川家綱公のとき東照宮に200石を下すなど寺勢をふるいました。

寛永15年((1638)1月の川越大火で現存の山門(寛永9年建立)を除き堂宇はすべて焼失しました。そこで3代将軍徳川家光公は堀田加賀守正盛に命じてすぐに復興にかかり、江戸城紅葉山(皇居)の別殿を移築して、客殿、書院等に当てました。家光誕生の間、春日局化粧の間があるのはそのためです。その他慈恵堂、多宝塔、慈眼堂、鐘楼門、東照宮、日枝神社などの現存の建物を数年の間に相次いで再建し、それが今日文化財として大切に保存されています。

尚、明治維新の神仏分離令からは東照宮、日枝神社は別管理となっています。

(喜多院HPより)

仙波東照宮の隨身門を出、左折80mの左手 40m奥に「喜多院」の「鐘楼門」があり、その先に「慈眼堂」がある。慈眼堂の後ろに「天海僧正墓碑」「曆応の碑」「歴代住職墓所」「延文の板碑」「苦ぬき地藏尊」があり、その先に「どろぼうばし」がある。

鐘楼門 附銅鐘 (国指定重要文化財・建造物)

江戸時代の喜多院の寺域は現在よりも相当広く、当時鐘楼門は、喜多院境内のほぼ中央にあり、慈眼堂へ向かう参道の門と位置づけられます。また、上層にある銅鐘を撞いて時を報せ、僧達の日々の勤行を導いたと考えられます。

鐘楼門は、桁行三間、梁間二間の入母屋造、本瓦葺で袴腰(中島注:袴腰は鐘楼・鼓楼の下層の末広

がりになった部分)が付きます。下層は角柱で正面中央間に両開扉を設け、他の壁面は縦板張の目板打です。(中島注:目板とは戸や壁に張った板の合わせ目に補強や隙間を防ぐために打ち付ける幅の狭い板)上層は四周に縁・高欄をまわし、角柱を内法長押(うちのりなげし)、頭貫(木鼻付)、台輪でかため、組物に出三斗(でみつと)と平三斗(ひらみつと)を組みます。中備(なかぞなえ)はありません。正面中央間を花頭窓とし、両脇間に極彩色仕上げの雲竜の彫物をかざり、背面も中央間を花頭窓とし、両脇間に極彩色仕上げの花鳥の彫物を飾ります。上層には、元禄十五年(1702)の刻銘がある椎名伊予藤原重休作の銅鐘を吊っています。寛永十五年(1638)の大火に焼け残ったともいわれますが、細部意匠などから判断して銅鐘銘にある元禄十五年頃の造営と考えるのが妥当だと考えられます。

昭和二十一年十一月二十九日指定 川越市教育委員会

慈眼堂

天海僧正は寛永20年(1643)10月2日寛永寺において入寂し、慈眼大師の諡号をおくられた。そして三年後の正保2年(1645)には徳川家光の命によって御影堂が建てられ、厨子に入った天海僧正の木造が安置されたのが、この慈眼堂である。一名開山堂ともよび、桁行三間(5.45m)、梁間三間で、背面一間通庇付の単層宝形造、本瓦葺となっている。宝形造は、四方の隅棟が一ヶ所に集まっている屋根のことで、隅棟の会するところに露盤があり、その上に宝珠が飾られている。

埼玉県教育委員会
川越市教育委員会

暦応の碑

暦応の古碑として指定されているが、その実は「暦応□□□□月十五日」の銘のある板石塔婆で、上部に弥陀の種子キリクを刻し下半分に52名にのぼる喜多院(無量寿寺)の歴代の住職の名と見られる者を刻している。喜多院の歴代の住職の名を知る資料は他にないので、この銘文が重要な意味を持つところから、県の史跡として指定になったものである。梵字の真下中央に「僧都長海現在」とあるので、暦応(南北朝時代初期)の頃の住職であったことがわかる。

埼玉県教育委員会
川越市教育委員会

延文の板碑

暦応の板碑とならんで立っている延文三年(中島注:1358年)のこの板碑は、高さ276cm、最大幅69.4cm、厚さ9cmで川越市最大の板碑である。暦応の板碑と同様に、上部にキリクがあり、そのもとに、僧1、法師2、沙弥32、尼21、聖霊4、の合計60名が刻まれており、「一結諸衆/敬白」とあり、文字通り結衆板碑である。

聖霊の4名は喜捨を募ってから板碑に刻むまでに少なからず歳月を費やしたことが考えられる。暦応の板碑が喜多院の歴代の住職の名を記したのに対し、この板碑は、その殆どが沙弥と尼で、共に僧階は最も低く、僧、法師が導師となって、在俗の人々が結衆したことがわかる板碑である。

埼玉県教育委員会
川越市教育委員会

苦ぬき地藏尊

昭和32年(1957)、信者さまが堂の改築を記念して奉納しました。苦抜き地藏尊は「釘抜き地藏尊」とも呼ばれ、その名の通り「すべての苦しみを抜き取ってくれる。」として多くの方々に親しまれています。(後略)

喜多院HPより

どろぼう橋

(前略)川越市によって昭和四十七年、木橋からコンクリート橋にかけ替えられましたが、この橋の名前にはこんな由来があります。

その昔、町中で泥棒をはたらいた者が、町奉行の捕り方に追われ、橋を渡り、喜多院の境内に逃げ込みました。泥棒は喜多院と東照宮の境内が御神領で、江戸幕府の御朱印地でもあり、川越藩の町奉行も捕まえられできないことを知っていたのでした。しかし、泥棒は寺男たちに捕らえられてしまい、厄除元三大師に心から罪を許してもらえるように祈り、すっかり改心して善人になりました。

そこで寺では幕府の寺社奉行にその処置を願い出たところ、無罪放免の許しが出、その後町方の商家でまじめに働き、一生を過ごしたということです。それ以来、この橋を『どろぼうばし』と呼ぶようになったということです。喜多院HP<喜多院七不思議と伝承話>より

鐘楼門から北へ50m程に「山門」があり、山門の東20mに「星野山喜多院」の大きな石柱が建っている。石柱から山門を見て右手に「中興第二十七世 天海大僧正」の立像がある。駐車場との間に小祠の「白山神社」がある。「白山神社」は、昔、歯痛の神として沢山の楊枝が上がっていた。歯痛の際、楊枝を借り、痛む歯を撫で治ればこれを二本にして返すというものである。『三芳野名勝図会』はこの地に初めて庵を結んだ仙芳仙人を祀るとしている。

その道路を挟んだ東側に「日枝神社」がある。

山門の右に接続して「番所」があり、山門を入ると右手に「五百羅漢」を並べた一郭が、その南側に「太子堂」と「木遣塚」、進んで「多宝塔」、その奥に「寺務所」「庫裡」「書院」「客殿」があり、「遠州流庭園」「紅葉山庭園」がある。

「本堂(慈恵堂)」、右横の「大黒天」、左奥の「松平大和守家廟所」がある。

山門<重要文化財・建造物>・番所<県指定・建造物>

山門は四脚門、切妻造で本瓦葺、もとは後奈良天皇の「星野山」の勅額が掲げられていた。冠木の上の斗栱(中島注:ときょう。主に柱上にあつて、深い軒を支える仕組み。斗<ます>と肘木<ひじき>とを組み合わせたもの)の表には竜と虎、裏に唐獅子の彫ものがあるほか装飾らしい装飾もないが、全体の手法が手堅い重厚さをもっている。棟札が残っており、天海僧正が寛永九年(1632)に建立したもので同十五年の大火を免れた喜多院では最古の建造物である。

山門の右側に接続して建っているのが番所で、間口十尺(約3.03m)、奥行二間半(約4.55m)、起屋根(むくりやね。中島注:ゆるやかな弧を描いた凸形の屋根)・瓦葺の小建築で、徳川中期以降の手法によるもので、県内に残るただ一棟の遺構である。

埼玉県教育委員会

川越市教育委員会

五百羅漢

(前略)この五百余りの羅漢さまは、川越北田島の志誠(しじょう)の発願により、天明2年(1782)から文政8年(1825)の約59年間にわたり建立されたものです。

十大弟子・十六羅漢を含め、533体のほか、中央高座の大仏に釈迦如来、脇侍の文殊・普賢の両菩薩、左右高座の阿弥陀如来、地藏菩薩を合わせ、全部で538体が鎮座しています。(後略)喜多院HPより
一体だけ「眼鏡をかけた羅漢様」がいらっしゃる。

太子堂縁起

(前略)特に室町時代末には仏教宗派にとらわれず太子を芸道の祖として尊ぶ信仰が生まれ大工左官屋根職等の仕事師の絶対的信仰をあつめたのであります。

当山の太子堂は弘化四年(注:1847)三月当山末寺金剛院境内地に創建され明治以降廃寺にともない日枝神社境内に移し更に明治四十二年三月、現在の多宝塔建立地に移築しそして昭和四十七年十一月この地に立派な六角太子堂として再興したものであります。(後略)

昭和五十一年二月二十二日 星岳亮善 識

多宝塔 県指定・建造物

多宝塔は、寛永16年(1639)に、山門と日枝神社の間にあった古墳の上に建立されました。その後、老朽化が進んだため、明治43年(1910)に慈恵堂と庫裏玄関との渡り廊下中央部分に移設されました。ただし、移築に際し大幅に改造されていたので、昭和48年(1973)に現在地に移し解体修理を実施し復元しました。総高13m、方三間の多宝塔で本瓦葺、下層は方形、上層は円形、その上に宝形造りの屋根がのります。江戸時代初期の多宝塔の特徴が表れています。(喜多院HPより)

県指定・建造物 多宝塔

「星野山御建立記」によると、寛永十五年九月に着手して翌十六年(1639)に完成、番匠は平之内大隅守、大工棟梁は喜兵衛長左衛門だったことがわかる。この多宝塔はもと白山神社と日枝神社の間にあった。明治四十五年道路建設のため移築されたが、昭和四十七年より復元のため解体が行われて昭和五十年現在地に完成した。多宝塔は本瓦葺の三間多宝塔で下層は方形、上層は円形でその上に宝形造の屋根を置き、屋根の上に相輪をのせている。下層は廻縁を回らし、軒組物は山組を用いて四方に屋根を葺き、その上に漆喰塗の亀腹がある。この亀腹によって上層と下層の外観が無理なく結合されている。円形の上層に宝形造の屋根をのせているので組物は四手先を用いた複雑な架構となっているが、これも美事に調和している。相輪は塔の頂上の飾りで九輪の上には四葉、六葉、八葉、火炎付宝珠がのっている。この多宝塔は慶長年間の木割本「匠明」の著者が建てた貴重な遺構で名塔に属している。

昭和五四年三月

埼玉県教育委員会 川越市教育委員会

庫裏 国指定重要文化財

客殿と書院に渡り廊下でつながれている庫裏は、現在拝観の入口となっています。客殿、書院と同様、江戸城紅葉山(皇居)の別殿を移築したものです。桁行10間、梁間4間の母屋、桁行東4間、西3間、梁間3間の食堂、それに玄関及び広間が付いています。母屋は一端は入母屋造り、他の端が寄棟造りになっていて、食堂は一端が寄棟造り、他の端は母屋につながり、すべて翺葺(とちぶき)形銅板葺。母屋には、一部に中2階があります。(喜多院HPより)

書院(春日局化粧の間) 国指定重要文化財

客殿につながる書院は、桁行6間、梁間5間の寄棟造り、柿葺(こけらぶき)です。客殿、庫裏と同じく江戸城紅葉山の別院を移築したものです。8畳2室、12畳2室があり、一部に中2階があります。この8畳間の2室には、それぞれの床の間が用意され、片方の部屋には脇床も設けられています。これらの部屋はこの建物が江戸城にあった頃、徳川家光公の乳母としてしられる春日局が使用していた部屋で、「春日局化粧の間」と呼ばれています。(喜多院HPより)

客殿(徳川家光公誕生の間) 国指定重要文化財

客殿は、書院、庫裏とあわせ江戸城紅葉山(皇居)の別殿を移築したものです。桁行8間、梁間5間の入母屋造で柿葺(こけらぶき)。12畳半2室、17畳半2室、10畳2室があります。12畳半のうち一室が上段の間で、床と違い棚が設けられ、その襖(ふすま)と壁面には墨絵の山水が描かれています。また、天井には彩色による81枚の花模様があります。湯殿と厠(便所)も設けられています。この上段の間は、この建物が江戸城にあった頃、3代将軍徳川家光公がここで生まれたということから、「徳川家光公 誕生の間」と呼ばれています。中央の17畳半の一室には仏間が設けられ、仏事を営めるように設営されています。仏間正面には、豪華な鳳凰と桐の壁画があります。(喜多院HPより)

慈恵堂 県指定有形文化財

慈恵堂は比叡山延暦寺第18代座主の慈恵大師良源(元三大師)を祀る堂宇です。大師堂として親しまれ、「潮音殿」とも呼びます。桁行9間、梁間6間、入母屋造りで銅板葺。現在、喜多院の本堂として機能し、中央に慈恵大師、左右に不動明王を祀り、毎日不動護摩供を厳修しています。川越大火の翌年、寛永16年10月にいち早く再建され、近世初期の天台宗本堂の遺構として貴重なものです。昭和46年度から4年間にわたり解体修理が行われました。天井に描かれた数々の家紋は、その際に寄進された壇信徒のもので

す。
なお、堂内には**正安2年(1300)に造られた銅鐘**(国指定重要文化財)があり、年に一度だけ除夜の鐘として撞かれています。(喜多院HPより)

潮音殿

喜多院の本堂である慈恵堂(大師堂)のことを「潮音殿(ちょうおんでん)」とも呼びます。お参りする時に少し見上げると、「潮音殿」の額がかかっています。

それは昔、広くて静かなお堂の中に入り正座し、耳を澄ませていると、なんと不思議なことにザザザー、ザザザーと、まるで潮の満ち引きのような音が聞こえてきたのだといいます。これには人々も驚き、まるで潮の音だというようになり、「潮音殿」といつしか呼ぶようになったということです。

また、大昔、喜多院の近くは見渡す限りの大海原でどこへ行くにも舟を使っていたそうです。それを仙芳仙人というお坊さんがお寺を建てるために海の主である竜神にお願いして陸地にしてもらったというお話も伝わっています。喜多院のすぐ近くの小仙波3丁目には「小仙波貝塚」(市指定史跡)もあり、近くまで海水が来ていたことが分かっています。(喜多院HPより)

正安二年の銅鐘

慈恵堂内に懸けられているもので、高さ90cm、口径45cmと小形である。しかし、鎌倉時代特有の重厚さを示しながらも、均整のとれた美しい姿をみせている。銘文は陽鑄で次のとおりである。

「武蔵国足立郡鳩井郷筈崎山 依悲母命鑄之 正安二年庚子三月十八日沙弥慶願 大工源景恒」

この銘文から、本鐘は正安二年(1300)に作られ、鳩井郷(現鳩ヶ谷市)の筈崎八幡宮に奉納されたものであったことがわかる。戦国時代に同社から持ち出され、川越地方の土中に埋められていたものを掘り出し、喜多院に施入されたものという。(喜多院HPより)

小江戸川越七福神 大黒天

当院には、小江戸川越七福神の大黒天が祀られております。

大黒天は古代インドの闇黒の神で、仏教での戦闘神です。平安以降食を司る台所の神として崇められました。又、日本の神大國主命を大國と混同させ、命の御神徳を合わせ、糧食財宝を授かる神として信仰を得ました。くろ(黒)くなってまめ(魔滅)に働いて大黒天を拜むと大福利益が得られます。

松平大和守家廟所 市指定史跡

慈恵堂の裏手に、石の柵に囲まれ、大きな五輪塔が並んでいます。ここは明和4年(1767)から慶應2年(1866)まで川越藩主であった松平大和守家歴代藩主の墓がある廟所(びょうしょ)として知られています。松平大和守家は、徳川家康公の次男結城秀康(ゆうきひでやす)の子直基(なおもと)を藩祖としています。同家が川越藩主であった7代100年の間に亡くなった5人の藩主、朝矩(ともりのり)、直恒(なおつね)、直温(なおのぶ)、斉典(なりつね)、直候(なおよし)が葬られています。(喜多院HPより)

喜多院山門を出て左に「白山神社」と「天海大僧正像」を見て、変則十字路を右折。30m程の左の民家の角に「喜多院 本地堂瑠璃薬師殿跡」の標柱がありました。

喜多院 本地院瑠璃薬師殿

徳川家康公の遺骸の日光への移送は、久能山を元和3年(1617)3月15日に出発、途中3月23日、仙波喜多院の大堂に到着し、天海僧正が導師となって26日までの4日間法要が行われた。法要が行われた大堂がこの「本地堂瑠璃薬師殿」です。現在、東京都上野にある「寛永寺」の本堂(根本中堂)がこの本地堂瑠璃薬師殿なのです。明治維新の戦争で焼失した寛永寺跡に、川越からはるばる上野へ新河岸川水運を使って本地堂瑠璃薬師殿を移送、移築したそうです。

標柱の脇には「仙波仙芳塚」の由来解説板が数枚ある。脇の露地を歩いて行くと「仙芳仙人塚」がある。裏側から入ってきたようだ。

仙芳仙人入定塚

喜多院の縁起に

「往古仙波の辺は海沼なりしが、仙芳真人法力を以て海水を去り、仏像を安置し、当院の草創とす」と記載されている。

これには伝承があります。

『遠い昔、一人の仙人がこの地に来て、寺を建てようとしたが、あたり一面海が広がって、寺を建てる土地が見つからない。困り果てていると、海の主・龍神が現れて

「なにかお困りのようだが・・・」

「拙僧、寺を建てようと思うが、寺の敷地が無いので、いかがしたものか・・・」

「して、その寺の敷地の広さは如何程か」

「欲は申さぬ。私の衣の広さほどでよいのだが」

「承知した。御坊の衣を広げなされ。そこだけ水を引いて進ぜよう。その地に寺をお建てなさい。」

かたじけないと仙人は衣を脱いで、さっと広げると、衣はみるみる広がって、海の水はあつという間に引け、広い土地が出来上がった。こうして出来た土地を仙人の波から仙波という。そして建てられた寺が喜多院の前身、無量寿寺だという。

棲家を失った龍神を憐れんだ仙人は、仙波下に龍神池を造り龍神のすみかとして安堵し、そのほとりに弁財天を祀った。』

今でも、この入定塚から東南600m程の処にある「双子池」で、傍らに「竜の池弁天」がある。

今から約7千年前の縄文時代、古東京湾は仙波付近まで海進しており、海水があった。武蔵野台地に沿って、南に上福岡、鶴瀬、富士見市水子に貝塚遺跡があり、その北端に小仙波貝塚がある。

また、仙波一帯は6世紀と考えられる地方豪族首長の古墳が多い。慈眼堂、日枝神社、愛宕などで代表される古墳の一つがこの仙芳仙人入定塚と考えられる。

入定塚を北へ25mで喜多院門前通りにでるので、信号を渡り左折。すぐ右に「日枝神社」がある。

日枝神社

川越市小仙波町にある「日枝神社」は、平安時代の天長7年(830)、無量寿寺創建の際、その鎮守として比叡山坂本の日吉山王社を勧請したのが始まりです。御神体は僧形の大山咋神(おおやまくいのかみ)。本殿は朱塗りの三間社流造り、屋根は銅板葺で、国の重要文化財に指定されています。建築時期は寛永15年(1638)の大火後に再建されたのか、それともそれ以前かは不明です。ただし、建築の一部に古形式が認められ室町時代末期(16世紀後半)とも考えられています。拝殿は、平成16年に再建され、桁行3間、梁間2間、入母屋造、柿葺型銅板葺です。

日枝神社のある場所は、仙波日枝神社古墳(多宝塔古墳)という前方後円墳です。前方部の一部に日枝神社が建築され、後円部の上にはかつて多宝塔(現在、喜多院に移築)がありました。明治45年に道路建設のため後円部は削られました。

現在の赤坂日枝神社は、文明10年(1478)に太田道灌が江戸の地に城を築くに当たってここから江戸城内紅葉山に分祀したことにはじまります。

今回は寄らないが、近くに「三変稻荷神社古墳(さんぺんいなりじんじゃこふん)」がある。

三変稻荷神社古墳

仙波古墳群を構成する一基である。墳頂に三変稻荷神社が祀られている。形状は方墳。墳丘は一辺20m~25mの歪んだ方形で、幅5~7mの周濠が巡る。出土品は、土師器、石釧、銅鏡。築造時期は出土品から4世紀末とされている。

日枝神社の角を右に曲がり、古墳を右に見ながら50m、左の駐車場の脇の道に入り、突き当りを右折。次の十字路の右側に「川越歴史博物館」がある。博物館の向かいに「成田山川越別院」がある。

成田山川越別院

成田山川越別院は、成田山川越別院本行院と称し、宗派は真言宗智山派。創建は嘉永6年(1853)に下総国新宿(にいじゆく、現・葛飾区)の石川照温が、廃寺となっていた本行院を成田山川越別院として再興したのが始まり。本尊は不動明王。本山成田山新勝寺の初めての別院。

山門右手に、高さ4m、重さ20tの「みまもり不動」があり、山門を入った右手には、手前から「大師堂」「開山堂」「出世稲荷」「福寿殿」、正面に「本堂」がある。

大師堂には、『真言宗開祖弘法大師(空海)』を中央に、左右に『興教大師(覚鑿、平安後期の真言宗の高僧、真言宗中興の祖、新義真言宗始祖)、『理源大師(聖宝、醍醐寺の開祖、天智天皇の6世孫)』の三大師が祀られている。

開山堂には、成田山川越別院の開祖、石川照温を祀っている。

出世稲荷は、大本山成田山新勝寺のダキニ(荼枳尼)天を招請して祀っており、家内安全・開運成就・合格成就などの御利益があるという。

福寿殿には、小江戸川越七福神の四番目札所として「恵比寿天」を祀っていて、商売繁盛・家内安全をはじめ開運成就にご利益があるという。

本堂には、ご本尊の不動明王が中央に鎮座し、左右に四大明王が安置されている。

成田山川越別院を出、北へ行き、次の交差点を斜め右に入ると、浮島公園の奥に「浮島神社」がある。左手に池があり、神社境内は小公園になっている。また、「川越城の七不思議」伝説の「片葉の葦」の舞台になっている。境内には「片葉の芦叢生の所」という碑が建てられている。

片葉(かたば)の葦

川越城七不思議の一つです。それは次のようなことです。

昔むかしのお話で、川越城に住んでいたお姫様が、戦いに敗れ、夜、乳母に連れられ、城を落ちのびました。そして城から少し離れた浮島神社の近く、七ツ釜といわれる、葦のたくさん生えている沼地辺りに逃げてきました。その時、お姫様は誤って七ツ釜の一つに落ちてしまいました。乳母は敵から逃れる身であることも忘れ、大声で助けを求めますが、誰も助けに来てはくれませんでした。年をとった乳母の力ではお姫様をどうすることもできません。お姫様は、ただもがくばかりでした。そして、近くの葦の葉にしがみつき、這い上がろうとしましたが、葦の葉はもろくも千切れ、お姫様は片葉を掴んだまま哀れな最期を遂げたのでした。その後、七ツ釜あたりに生い茂る葦は、すべて片葉の葦になったということです。

浮島稲荷神社

地元の人々から「うきしま様」と呼ばれ、広く親しまれているこの神社が、いつ頃建てられたのかは定かでない。かつては末広稲荷とも呼ばれ、安産の神として麻を奉納する習慣が伝えられている。

言い伝えによれば、大昔、星野山(今の喜多院)にあったのを慈覚大師が喜多院を開いたときにここに移したとか、また一説には、太田道灌の父太田道真が川越城を築城した際に、城の守護神としてこの地に祀ったものとも伝えられている。現在ある社殿は、大正四年(1915)に改築したものである。

今では、この一帯もすっかり変わってしまったが、以前は「七ツ釜」といって、清水の湧き出る穴が七つもあり、一面葦の生い茂った沼沢地であった。そのため遠くから神社を眺めると、ちょうど島のように浮かんで見えたところから、浮島神社と呼ばれるようになったという。

また、伊勢物語を初めとして、昔からしばしば和歌に歌われた「三芳野の里」や「たのむの沢」は、このあた

りを指すのだともいわれている。

昭和五十七年三月

川越市

浮島神社から北へ進み、突き当りを左折。100m進み、右斜めの道を入り、道なりに左に曲がり突き当りを右折。30m先の丁字路を右折、110m程の左の小高い丘の前に広場があり、「川越城田曲輪門跡」の石碑があり、傍に「川越城富士見櫓跡」の標柱がある。いよいよ、川越城に入城です。

川越城の歴史

川越城は、扇谷上杉持朝(おうぎがやつうえすぎもちとも)が古河公方足利成氏(しげうじ)に対抗するため、長禄元年(1457)に家臣の太田道真(資清)・道灌(資長)父子に命じて築城したものです。当時の規模は、後の本丸・二の丸を合わせた程度と推定されています。

やがて川越城は、天文6年(1537)後北条市の占拠するところとなりましたが、同15年(1546)川越城の奪還を図った上杉氏は後北条氏の奇襲に会い、大敗して群馬に逃れ、それ以後、後北条氏の支配が決定的となりました。川越城を掌中に収めた後北条氏は、周辺の旧上杉氏所領を直轄領に組み込むとともに、城代として譜代の重臣大道寺氏を配置しました。

天正18年(1590)、豊臣秀吉の関東攻略に際し、川越城は前田利家に攻められ落城しました。やがて同年8月徳川家康が一族家臣を従えて関東に移るにおよび、重臣を重要な地に配して領国の安定を図りました。川越には酒井重忠が1万石をもって封じられ、ここに川越藩の基礎が成立しました。

寛永16年(1639)に藩主となった松平信綱は川越城の大幅な拡張・整備を行い、近世城郭の形態を整えることとなりました。即ち本丸、二の丸、三の丸等の各曲輪、四つの櫓、十二の門よりなり、総坪数は堀と土塁を除いて4万6千坪となりました。

川越城には、その後も明治維新に至るまで、幕府の要職にある大名が置かれました。(後略)

(川越城本丸御殿HPより)

広場から階段で小高い丘に上ると御嶽神社と浅間神社が祀られたおり、ここがかつての「富士見櫓」の跡で、富士見櫓は長さ約15m、横幅約14m、三層の櫓で、天守閣の代わりをしていたという。

富士見櫓跡

御嶽神社が祀られているこの高台は、かつては川越城の富士見櫓が建てられていたところである。

櫓は矢倉と書いて、合戦の際に物見として、あるいは防戦の足場として、城壁や城門の高い場所に設けられた建物を意味するが、天守閣のなかった川越城には東北の隅に二重の虎櫓、本丸の北に菱櫓、西南の隅に三層の富士見櫓があって、城の中で一番高い所にあった富士見櫓が天守閣の代わりになっていたと思われる。

今日では、木々や建物のため、すっかり眺望も失われてしまったが、その昔はこの高台に立てば、富士見櫓の名の通り遠く富士山までも望めたことであろう。

元来、城の構造及び建造物は戦略上の都合もあって、その大部分が明らかにされることはなく、正確な規模は分からないが、江戸末期の慶應二年(1866)に川越城を測量した記録によれば、この富士見櫓は長さ八間三尺(約十五メートル)、横八間(約十四メートル)あったと記されている。

昭和五十七年三月

埼玉県

往時の川越城には、城の中央に「太鼓櫓」、東北の隅に「虎櫓」、本城の北に「菱櫓」、西南の隅に「富士見櫓」の四つの櫓があった。それぞれの機能は、

「富士見櫓」…高台にあり、天守閣の代わりで、敵からの攻撃や侵入を見張っていた。往時はこの高台からその名の通り富士山まで眺められたと思われる。

「虎櫓」……城の出入りを固め警備した。

「菱櫓」……食料を保管していた。

「太鼓櫓」……太鼓が置かれ、時刻と非常時にそれを打って城下一円に知らせた。

富士見櫓を浅間神社から下り、直ぐに左折。突き当りを左へ20m程行き右の細い道に入る。80m程で三芳野神社参道に出るので左折。正面突き当りに拝殿がある。この参道が「とうりゃんせ」の童謡の本となりました。

三芳野神社は、川越城築城以前から当地にあったが、川越城築城に伴って城内の天神曲輪に位置するようになった。このため、一般庶民の参拝が難しくなり、「お城の天神様」と言われるようになった。しかし、一般庶民の信仰が厚いことから時間を区切って参詣することが認められた。しかし、一般参詣客に紛れて密偵の城内侵入を避けるため、帰りの参詣客は警護の者によって厳しく調べられており、当社の参道が舞台といわれる童謡「とうりゃんせ」にその様子が歌われると共に、「行きはよいよい、帰りは怖い…」の歌詞になったという。拝殿の左手に「わらべ唄発祥の地」の碑がある。

三芳野神社 市指定史跡

御祭神は、素戔鳴尊・奇稻田姫。相殿神は、菅原道真公・菅田別命。

創建は、大同二年(807)とも言われ、川越城築城以前から当地に鎮座していた古社。三芳野とは川越一帯の旧地名で、平安時代初期に成立したと言われる在原業平の「伊勢物語」にも『入間の郡三芳野の里』として出てくる。

現存する社殿は、川越城の鎮守として、寛永元年(1624)城主酒井忠勝によって造営されたと言われ、優美な権現造りの社殿は、名前の由来となった「三芳野天神縁起絵巻」と共に市の指定文化財になっている。翌寛永二年(1625)、天海僧正を導師として遷宮式が行われ、以後、喜多院・仙波東照宮と共に幕府の直轄社となっている。

明暦二年(1656)には、4代将軍家綱の命を受けた川越城主松平信綱により大改造が行われ、この大改造時に江戸城二の丸の東照宮本殿を移築して当本殿とし、寛永に建てられた拝殿との間に幣殿を新しく設け、権現造りの形態としている。

三芳野神社の境内に「川越城の七不思議伝説」の説明板があり、その一つ「初雁の杉」と彫られた石碑がある。(この辺りで、昼食となると思う)

参道の左の高台は、天神曲輪と本丸の境の土塁。

初雁の杉

昔、城内にある三芳野神社の裏に大きな杉の老木があった。この辺りは「三芳野の里」と言われ、『伊勢物語』に詠われている歌のように、昔から有名な歌枕であった。

三芳野の田面(たのむ)の雁はひたぶるに 君が方にぞよると鳴くなる

わが方によるとなくなる三芳野の 田面(たのむ)の雁をいつかわすれむ

この歌に詠われる雁と、三芳野神社の杉について次のような言い伝えがある。

いつの頃からか、三芳野の田面(たのむ)の里に、毎年北方から初雁が少しも時を違えず飛んできた。いつも杉の真上まで来るとガアガアと三声鳴きながら杉の回りを三度回り、南を指して飛び去ったという。この故事から、川越城は別名を初雁城と言われている。また、太田道灌がこの杉の梢に旗を立てた処から、旗立の杉とも言っている。

三芳野神社の左側を裏手の駐車場へ向かう。駐車場は川越城本丸跡で、遺構が残っているとのこと。駐車場の西に「川越城本丸御殿」がある。

川越城本丸御殿

川越城本丸御殿は、嘉永元年(1848)に時の藩主松平斉典が再建したもので、本丸御殿全体では16棟、1025坪の広さがあったが、明治維新後徐々に解体され、現在は大唐破風造りの玄関、書院造りの大広間、移築復元された家老詰所が残っているのみである。

川越城本丸御殿を出て、北に向かうと川越城本丸門跡の標柱があり、突き当たりが二の丸跡で、「川越市立博物館」があり、敷地内に「川越城の七不思議伝説」の一つ「霧吹きの井戸」が復元されている。

市立博物館から西へ、郭町交差点を過ぎ、100m強の左側に「中ノ門堀跡」がある。

中ノ門堀跡

江戸時代、川越城は、江戸の北の守りとして重要視され、寛永16年(1639)に藩主となった松平信綱は、城の大改修を行った。この際、中ノ門堀が造られたと考えられている。

堀は、現在の市役所付近に当たる西大手門側から本丸方向への敵の侵入を阻むために巧みに配された堀の一つであった。

中ノ門堀の特徴は2つあり、

その1つは、城壁側とその反対側の法面勾配が異なること。西大手門側の法面勾配が30°、城壁側が60°あり、城側が切り立っているため、敵が攻めてきた際にこの堀を越えることが出来ない。堀の底に降りたり、戻ったりした敵兵を城壁の狭間から弓や鉄砲で迎え撃つ戦法。

2つ目は、中ノ門堀以外に食い違った2本の堀を造り、敵兵を直進させないようにし、ゆっくり進む敵を城壁の狭間から撃ち取る戦法が出来る。

堀と堀の間に「中ノ門」があった。門は、残されている絵図によると二層の立派な櫓門であったようである。

中ノ門堀から郭町交差点に戻り左折、道なりに250m強進むとバス通りに突き当たる。信号を渡った所に「川越氷川神社」がある。

川越氷川神社

祭神は、素戔鳴尊、奇稻田姫命、大己貴命、脚摩乳命、手摩乳命。二組の夫婦神が鎮座していることから古くから夫婦円満・縁結びの神社として信仰されている。

創建は、欽明二年(541)、入間川で夜な夜な光るものがあり、これを氷川神の霊光と捉え、当地に氷川神社を勧請したと伝えられる。

本殿は、入母屋造銅板葺向拝付で、嘉永二年(1849)に藩主松平齊典の寄進により完成した。彫物師は、嶋村源蔵と飯田巖次郎で、江戸彫りの精巧な彫刻が施されている。

境内には、八坂神社、柿本人麻呂神社、稲荷社、護国神社他沢山の摂社・末社が祀られており、大鳥居、舞殿、払いの川がある。

・八坂神社(旧牛頭天王社)は、寛永十四年(1637)に三代将軍徳川家光公が江戸城二の丸に東照宮として建立したもので、明暦二年(1656)に川越城内の三芳野神社の外宮として移された。川越城廃城で明治五年(1872)に当地に移築され社殿となっている。

・柿本人麻呂神社は、万葉の歌人柿本人麻呂を祭神とする武蔵国内唯一の社で、人麻呂の子孫である綾部一族が戦国時代川越に移住した際に奉斎した。

・大鳥居は、木造では日本有数の鳥居(笠木の幅20m、柱周り6m)で、扁額の社号は勝海舟の直筆。

・舞殿は、宝永元年(1704)の建立。

・払い川は、ここで人形流しを行い、疫病や身の穢れを洗い流す、祓いを行こなう。

川越氷川神社を出て右折、西に向かって進み200m、裁判所前信号の先40m程で右折する。100m程で左折して100m弱の右手に「東明寺」がある。宗派は時宗、開山は一遍上人(正応二年1289寂)。藤沢市の清浄光寺(遊行寺)の末寺。本尊の虚空蔵菩薩は慈覚大師円仁の作で秘仏。境内に「川越夜戦跡」の碑がある。川越夜戦は関東の勢力図を大きく変えた歴史的転換点の戦いであった。

東明寺(とうみょうじ)

東明寺は、時宗(開祖一遍上人)の寺で稲荷山称名院東明寺と称し、本尊は虚空蔵菩薩である。

お寺の位置は、川越台地の先端が水田地帯に接する北の端にある。このあたりからは、新河岸川を境として川越の町の北側を入間川を主流とする分流が幾筋も流れ、水田地帯を形成しており、古くからこの穀倉地帯を領する多くの武士団が存在した。東明寺は、こうした土豪の一人河越氏の荘園の東端に連なる広い寺領を有していた。その寺領は、東明寺村、寺井三か村、寺山村などに及び、広大な境内を有して、その惣門は今の喜多町の中ほどにあったと伝えられている。このことから、喜多町の古名を東明寺門前町と称したといわれている。天文十五年(1546)四月に戦われた上杉、北条軍の川越夜戦は、一名東明寺口合戦といわれ、この地の要路松山街道を含んだ東明寺寺領と境内で争われたものである。

昭和五十七年三月 埼玉県

川越夜戦跡

天文六年(1537)の戦いで、北条氏綱に川越城を取られた扇谷上杉朝定は、再びこれを奪還すべく山内上杉憲政、古河晴氏(古河公方足利晴氏)と連合で総勢八万騎をもって、同十四年十月に川越城を包囲した。一方、福島(くしま)綱成のひきいる城兵は、わずか三千でたてこもっていたが、翌十五年春にはすでに兵糧も尽きて非常な苦戦におちいついていたところ、北条氏康が八千騎をひきいて援軍としてかけつけ、四月二十日の夜陰に乗じて猛攻撃を開始した。これに呼応して城兵も城門を開いて打って出たので、東明寺口を中心に激しい市街戦となった。多勢をたのんで油断しきっていた上杉・古河の連合軍は、北条方の攻撃に耐えられず散々となって松山口に敗走をはじめ、この乱戦の中で上杉朝定は討死し、憲政も上州に落ちのびたと伝えられている。敵に比べて問題にならないくらい少ない兵力で連合軍を撃滅したこの夜戦は、戦略として有名である。

昭和五十八年三月 埼玉県

この戦いで、古河公方晴氏は古河に逃げ帰り、扇谷上杉氏当主朝定が戦死し、扇谷上杉氏は滅亡。山内上杉憲政は三千人余の死者を出し、居城の上野平井城(群馬県藤岡市)に逃れた。その後、山内上杉憲政は武田信玄との戦いに敗れたり、家臣が離反し北条氏へ服属が多く、天文二十一年三月居城平井城が陥落。越後国の長尾景虎の許に逃れる。越後に入った憲政は長尾景虎を養子にし、上杉姓を名乗らせ、その後、関東管領職を譲渡し、景虎(後の謙信)を上杉家の家督を継がせ、正式な後継者とした。

東明寺の参道を出て、真直ぐ進むと県道12号線に合流する。左へ県道を130m程南下した右側に「**広濟寺**」がある。

広濟寺は、青鷹山慈眼院と号する曹洞宗の寺で、青梅市の天寧寺の末寺である。川越夜戦の2年後の天文十七年(1548)に、後北条氏の川越城代になった大道寺駿河守政繁が建立、開山は天寧寺第5世の広庵芸長(こうあんうんちょう)師。

道路から少し入った所にある山門をくぐると右手の鐘樓の隣に小さなお堂があり、中に2基の石のお地藏様が祀られている。

1基は、「腮(あご)なし地藏」で、虫歯や歯痛に靈験があり、下顎がありません。顎が無いから歯が無い。歯が無いから歯痛が無い。歯痛に苦しむ人が此処にきて祈願すれば、歯痛が治ると信じられ、治ったら柳で楊枝を作って奉納するとのこと。

2つ目は、「しやぶき尊(しやぶきばば)」で、咳きや喘息、百日咳によく効くとの信仰がある。四肢はなく、荒縄が巻かれている。このしやぶきばばあに縄を巻いて願をかけ、百日参りをすると、咳や喉の病気によく効くと伝えられている。咳がひいたら縄を解いてあげ、お礼としてお茶と金平糖、または煎り豆をお供えしてお参りするとのこと。

山門の左手に石の鳥居があり、その奥に金毘羅堂がある。金毘羅堂の南(向かって左)にある墓地の中に地藏尊がある。その名を「牢屋地藏」と呼び、姿は舟型の面に円頂、立姿の地藏を浮き彫りし、高さ約1m程。

牢屋地藏の由来は、『往時、江戸時代に当寺の南の近いところに高沢町(今の元町)があった。そこは川越の刑場の跡で、牢獄があった。そのころに処刑された人は、この場所において斬首されるに先立って地藏尊の前で念仏をすることが許された。大正の終わりとなってこのところは伊藤某の所有となったが、地藏をそのままにしておいてはもったいないと、広濟寺に頼んで墓地に移した。

舟型光背のいちぶが欠けているのは、夜陰に乗じて悪徒が密かに来て小石で塔を叩き、落ちた石の粉を紙に包んで持ち帰る。この粉を懐中に所持しておれば、悪事をしても捕らえられないと信じられていた。

広濟寺の斜め右に今日の終点・喜多町バス停がある。ここから川越駅までバスに乗り、川越駅からは東武東上線で朝霞台～JR武蔵野線北朝霞から西国分寺に出る。

川越街道ウオークと川越市内名所旧跡めぐりの旅はお疲れさまでした。